

公益財団法人慈愛会と垂水市の包括連携協定の締結に伴い今村総合病院の医師の皆様にご協力いただき、市民の皆様の健康増進及び子育て支援啓発を目的に、4カ月に1回、皆様にお伝えしたい情報をコラム掲載いたします。

## 思春期の娘さんのために、親として「今」できる事 ～子宮頸がんワクチンというプレゼント～

**現** 在思春期のあなたの娘さんお孫さんが、もし20代で子宮頸がんを発症してしまったら…？

子宮頸がんが20～40歳代の女性に増えています。進行がんになるまで無症状ですので、妊娠して初めて産婦人科を受診した時に、妊娠中の子宮にがんが見つかる女性もいます。子育て期に忙しさからがん検診を受けず、更年期に不正出血で受診した時には進行がんという女性も多いです。

オーストラリアでは、2028年には新規の子宮頸がん患者はほぼいなくなると予想されているのに対し、日本では子宮頸がんて泣く女性が増え続けています。なぜでしょうか？

WHOは、①15歳までのHPVワクチン接種、②定期的な子宮がん検診、③早期に診断治療を行う、の3つを9割以上の方が受ける事で、子宮頸がんは30年後撲滅できるとシミュレーションしています。①のHPVワクチンとは子宮頸がんワクチンのことです。日本でも2013年から定期接種に追加され、小学校6年～高校1年の女子は無料でワクチンを接種することができます。しかし接種率は1%未満であり、多くの女性が「がんから子宮を守るチャンス」

を逃しています。

約10年前、子宮頸がんワクチン接種後に運動機能の障害や慢性の痛みなど「多様な症状」をきたした若い女性の映像が、テレビで頻りに放映されたことを覚えていらっしゃる方も多いでしょう。その際、精査のため国が積極的勧奨を中止しました。その後の国内・国外での調査で、このような「多様な症状」は思春期に時々発症するものであり、子宮頸がんワクチンとの直接の関係性は無いと判明しました。子宮頸がんワクチンは世界中で安全なワクチンとして認められており、2020年には90以上の国で国家プログラムとして接種され、子宮頸がんの予防効果も証明されています。

2022年4月より、国内外で安全性と有効性が確認されたこと、副反応が生じた時の診療体制も整ったことから、子宮頸がんワクチンの積極的な接種の呼びかけを再開することが決まりました。

接種のお知らせが届いたご家庭は、正しい知識のもと、娘さんの子宮頸がんワクチン接種を前向きにご検討ください。正しい知識を得るには、「子宮頸がん」とHPVワクチンに関する正しい理解のために」という日本産科婦人科学会のサイトがお勧めです。2013年以降ワクチン接種を受けなかった方も、接種のチャンスがありますので調べてみてください。



今村総合病院産婦人科専門医  
貴島 佳子

「一人でも多くの鹿児島女性の幸せになって頂きたい」をモットーに、産科・婦人科疾患を中心に患者様に寄り添った診療を行っている優しい先生です。仕事・子育て・介護と頑張る女性の心身の不調に対する女性漢方療法が好評です。

詳しくは、日本産科婦人科学会のHPをご覧ください。



問 保健課健康増進・元気プロジェクト係 ☎ 内線 138